

(21×21)

## あおくと きいろちゃん

レオ・レオーニ作 藤田圭雄訳  
至光社 1967年(アメリカ1959)

あおくんはある日、いちばんの仲よしのきいろちゃんと遊びたくなって、あちこちさがすうち、町角でばったり会いました。うれしくて、うれしくて、ふたりは、ひとりのみどりの子どもになりました。ちぎり紙の色と形だけで表現された単純な絵ですが、幼い子もすぐにお話にひきこまれて、主人公たちと一緒に遊んだり、悲しくなったり、ほっとしたり。アメリカのグラフィック・デザイナーが描いたユニークで美しい絵本です。



(27×27)

## 雨、あめ

ピーター・スピアー  
評論社 1984年(アメリカ1982)

急にふりだした雨の中へ、子ども達は雨具を着て散歩にでかけます。トイからあふれる雨水を、さかさにした傘に受けたり、雨やどりの動物を探したり、キラキラしたクモの巣にみとれたりします。そして画面いっぱいに広がる雨紋の美しいこと。雨で一変した世界で子ども達は充分あそびます。夜の道は街灯や車のライトが雨にかすんで静かです。翌朝、陽が輝き又あたらしい世界が始まります。絵だけの本ですが、細かい発見が楽しめます。

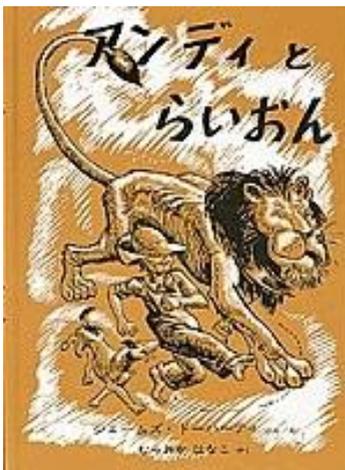


(18×26)

## アンガスとあひる

マージョリー・フラック作・絵 瀬田貞二訳  
福音館書店 1974年(アメリカ1930)

アンガスはしりたがりやの小犬です。ある日、飼い主のすきを見て、日頃から気になっている音の正体を確かめに外へ出ていきました。それは二羽のあひるでした。アンガスは勢いよく水飲み場まであひるを追って行きますが、形勢は逆転し、あひるたちに追われ大慌てで家に逃げ帰ります。短いストーリーですが、彩色と白黒のページが交互に配され、動物たちの表情も生き生きと描かれた楽しい絵本です。他に『アンガスとねこ』『まいごのアンガス』があります。

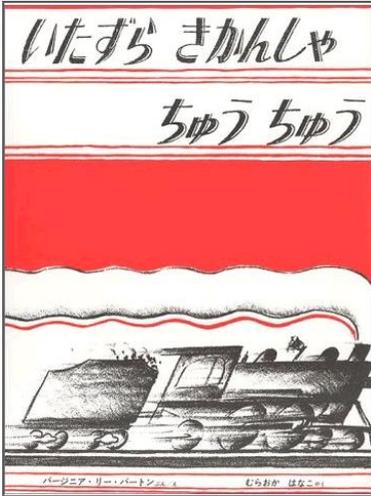


(27×20)

## アンディとらいおん

ジェームズ・ドーハーティ文・絵  
村岡花子訳  
福音館書店 1961年(アメリカ1938)

図書館で借りた本で、ライオンに夢中になったアンディは、ある日、本物のライオンにばったり出くわします。びっくりしたアンディとライオンは、どちらも逃げようとして、大きな岩のまわりを全速力で、くたびれはてるまでかけまわります。事態は思わぬ展開となり、さいごは、得意満面、ライオンといっしょに町を行進するアンディ。愉快なお話が達人な筆使いの躍動的な絵とあいまって、古きよき時代のアメリカらしい、元気の出る絵本です。



(32×24)

## いたずらきかんしゃちゅうちゅう

バージニア・リー・バートン文・絵

村岡花子訳

福音館書店 1961年(アメリカ1937)

真黒くて、びかびか光っていて、きれいなかわいい機関車。これが、ちゅうちゅうです。毎日、黒い客車を引っぱって、町を行ったり来たりするのがいやになり、ある日、ちゅうちゅうは一人で走り出しました。踏切りを走り抜け、はね橋を飛び越し、走りに走って……。猛スピードで走るちゅうちゅうと、それにびっくりする動物や人間たちの様子が、大きな画面いっぱいにダイナミックに描かれ、独特の迫力があります。



(19×27)

## いたずらこねこ

バーナディン・クック作

レミィ・チャーリップ絵 間崎ルリ子訳

福音館書店 1964年(アメリカ1956)

小さなかめが池を出て散歩にでかけると、いたずらこねこがやってきます。はじめてかめを見たこねこは、前足でこの奇妙な動物の頭をポン！すると、首が消えてなくなり、こねこのめだまは飛び出しそうになりました。こねこは池に向かってあとずさり。見開きいっぱいの直線上を、こねことかめの心の動きと体の動きをひとつひとつゆっくり追っていきます。新しいものに出会ったこねこの不安な気持ちが、よく表われている絵本です。



(20×27)

## おおきなかぶ

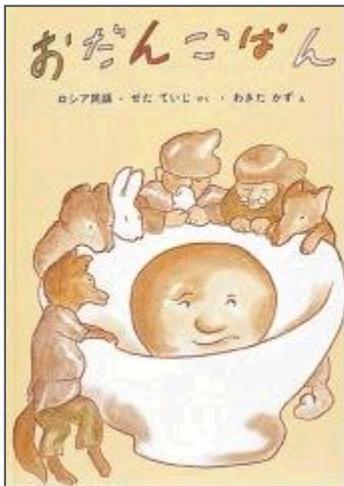
ロシア民話

A・トルストイ再話 内田莉莎子訳

佐藤忠良画

福音館書店 1962年

おじいさんが植えたかぶは、とてつもなく大きく育って、一人ではとても抜けません。おばあさんを読んできても抜けないし、孫娘と三人がかりでひっぱっても抜けません。犬を呼んできても、猫を呼んできても、まだまだ抜けません。小さなネズミを呼んできて、おおきなかぶはやっと抜けました。うんとこしょ、どっこいしょ、とくり返されるかけ声は、小さい子どもたちも声をそろえやすく、簡単に遊びに発展させられる楽しい絵本です。



(31×22)

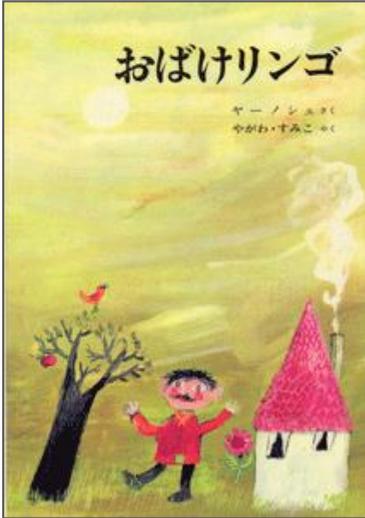
## おだんごばん

ロシア民話

瀬田貞二訳 脇田 和絵

福音館書店 1966年

窓のところで冷やされていたおだんごばん。おじいさんとおばあさんのところから、ころころころ、ころがって逃げ出します。うさぎ、おかみ、くまと次々に会って食べられそうになるのですが、その度に「ぼくはてんかのおだんごばん…」と歌をうたって難をのがれていきます。でも、最後に出会ったきつねに歌をほめられてすっかりいい気分になったおだんごばんは…。次々に言葉が積み重ねられていく歌も楽しめます。あたたかみのある落ち着いた色使いの絵本です。



(29×21)

## おばけリンゴ

ヤーノシュ作 矢川澄子訳  
福音館書店 1969年(スイス1965)

ワルターのたった一本のリンゴの木に、願いがかなって、一つだけ実がなりました。でも、だいじにだいじに育てたリンゴの実はおばけのように大きくなって、市場にもっていても、だれも買ってくれません。やっとの思いで持ち帰り、おばけリンゴの番をつづけるなさないワルター。でも、思いがけないことが起こって、大きなリンゴが役に立つ日がきます。独特の色使いが美しい、幸せとはなにかを考えさせてくれる絵本です。



(26×27)

## おふろだいすき

松岡享子作 林明子絵  
福音館書店 1982年

ぼくがお風呂に入っていると、突然、湯船からかめやオットセイが現れました。皆で石けんすべりやシャボン玉で遊んでいると、かばまで出てきました。かばの体を洗ってあげながら、いつの間にかぼくの体もしっかり洗えました。仕上げにくじらのシャワーを浴びて、お湯につかっている気持ち。でも、お母さんがのぞいたとたん…。やわらかいクリーム色と湯気に包まれた画面は、お風呂嫌いの子どももあたたかい気持ちにしてくれそうな絵本です。

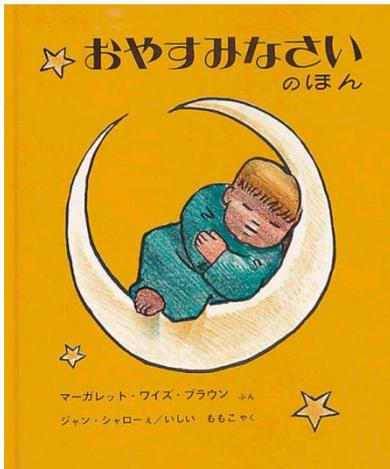


(18×21)

## おやすみなさいおつきさま

マーガレット・ワイス・ブラウン作  
クレメント・ハード絵 瀬田貞二訳  
評論社 1979年(アメリカ1947)

大きなみどりの部屋の中、こうさぎがベッドにいます。電話がひとつ、赤い風船ひとつ、絵の額がふたつ…とひとつひとつ部屋にあるものが紹介されていきます。月が昇り窓の外があかるくなると、暖炉と人形の家のあかりを残して部屋はだんだん暗くなります。「おやすみおへや」「おやすみおつきさま」とまたひとつひとつに声をかけ「おやすみそこここできえるおとたちも」とおわります。優しい詩の響き、明から暗への美しい絵が、お休み前の安らかなひとときを与えてくれます。



(25×21)

## おやすみなさいのほん

マーガレット・ワイス・ブラウン文  
ジャン・シャロー絵 石井桃子訳  
福音館書店 1962年(アメリカ1943)

「よるになります。なにもかもみなねむります」とはじまるこの絵本では、ことりも魚も羊もりすも、森のけものも、そして船や車も、人間の子も達もみんな満ち足りた眠りについていきます。ページ毎にくり返される「ねむたい〇〇たち」と言う言葉は子守歌のように耳に残り、静かな安らぎに満ちた温かい気持ちになって眠りの世界へと誘います。全体に柔らかい色調に統一された絵も美しい絵本です。

## おやすみなさい フランス



ラッセル・ホーバン文、ガス・ウィリアムズ絵  
まつおかきょうこ訳

(26×21)

## おやすみなさいフランス

ラッセル・ホーバン文

ガス・ウィリアムズ絵 松岡享子訳

福音館書店 1966年(アメリカ1960)

あなぐまの女の子フランスは、寝る時間になっても、ぜんぜん眠くありません。ベッドに入っても、こわいものや気味の悪いものがつぎつぎにあらわれて、気になってしかたがないのです。そのつど、ベッドを出て訴えに行くフランス…。お父さんの対応がみごとです。フランスだけでなく、読んでもらっている子どもの方も、いっしょにくだびれてなっとくして眠ることになるでしょうか。絵はガス・ウィリアムズからラッセルの夫人リリアンに引き継がれ、『フランスのいえで』や『ジャムつきパンとフランス』など続編が出ています。

## かいじゅうたちのいるところ



モーリス・センダックさく じんぐうてるおやく

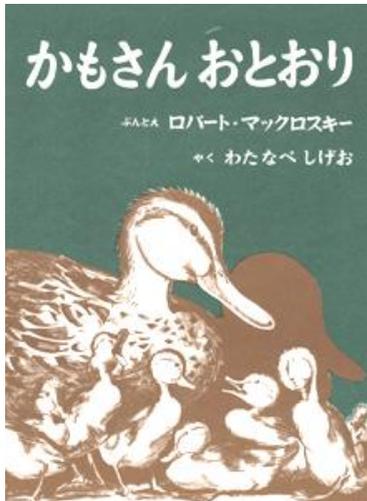
(24×26)

## かいじゅうたちのいるところ

モーリス・センダック作 神宮輝夫訳

富山房 1975年(アメリカ1963)

大あばれしたマックスは、夕ごはんぬきで寝室にほうりこまれました。すると寝室に木がはえて森になり野原になり、海になってマックスの舟がやってきます。舟はマックスをかいじゅうたちのいるところへ連れていきます。かいじゅうたちの王さまにもらって、思いつき遊んだマックスは、やがて、やさしいだれかさんのところへかえりたくなります。時にはかいじゅうになってしまう子どもたちが、大好きな本です。



(31×24)

## かもさんおとおり

ロバート・マックロスキー文・絵

渡辺茂男訳

福音館書店 1965年(アメリカ1941)

かもの夫婦がボストンの町で安全な川の中州をみつけ、8羽のひなをかえしました。ある日、かもの奥さんはしっかり育ったこもたちを引き連れ、町の中を通ってお引越。大通りでは車の流れを止めて大騒ぎになりますが、おまわりさんに交通整理をしてもらい、町の人々が温かく見守る中を、鼻を上向け、一列に並んで体をふりふりかも歩き。夫の待つ公園に無事到着します。達者な筆づかいの、かもや人物の生き生きとした表情が魅力的です。



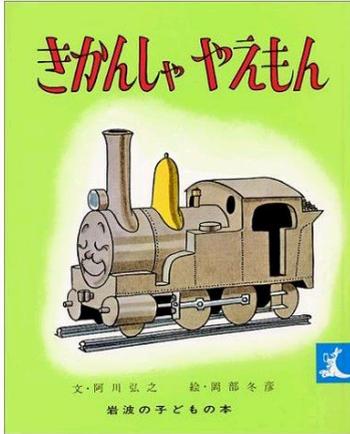
(26×26)

## ガンピーさんのふなあそび

ジョン・バーニンガム作 光吉夏弥訳

ほるぷ出版 1976年(イギリス1970)

川のそばに住むガンピーさんは、ある日小舟にのって出かけます。「いっしょにつれてって」と、子どもたちがやって来ます。そのあと、うさぎ、ねこ、それにこうしややぎまでできます。ガンピーさんは、誰でも気持ちよく乗せてやりますが、ひとこと注意は忘れません。みんなは楽しそうに川を下ります。でもそのうち注意を忘れて大さわぎ、アツという間に舟が！画面いっぱいのクライマックス。「またね」と余韻があって、ゆったり楽しませてくれます。

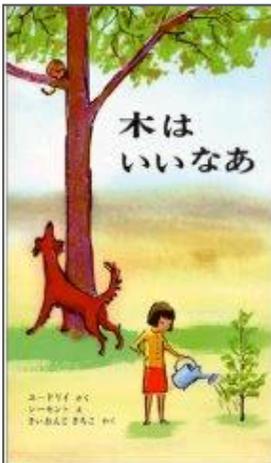


(21×17)

## きかんしゃやえもん

阿川弘之文 岡部冬彦絵  
岩波書店 1959年

やえもんは、石炭をたいて、黒い煙をはきながら走る機関車です。すっかり年をとったやえもんは、新型の電気機関車やレールバスにばかりにされて、「しゃっしゃっ、しゃくだ」とおこりながら走っていると、やえもんの火の粉が稲むらにかり、田んぼが火事になりました。くず鉄にされそうになったやえもんが交通博物館に入って幸せになるまでのお話。声を出して読むと擬音が面白く、子どもはやえもんの身になって話についてきます。



(29×17)

## 木はいいなあ

J・ユードリイ作 マーク・シーモント絵  
西園寺祥子訳  
偕成社 1976年(アメリカ1956)

うっそうとした林の中に、寝ころんでいる人がいて、「木がたくさんあるのはいいなあ」という語りかけではじまるこの本は、落葉たき、りんご拾い、木陰の昼寝など、ページをめくるたびに、四季折々の木を中心とした人や生き物の生活の風景がやさしく淡々と描かれています。「木はいいなあ」という作者の素直な気持ちがあふれている散文詩です。鮮やかな色彩の絵も、自然の美しさを一層印象深いものにしていきます。

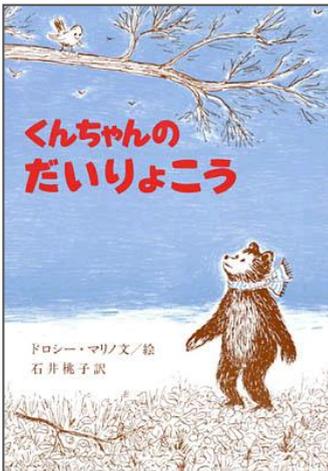


(19×27)

## ぐりとぐら

中川李枝子と大村百合子  
福音館書店 1963年

野ねずみのぐりとぐらは、森の中で大きなたまごを見つけました。あんまり大きなたまごなので、道具や材料を運んできて、森でカステラ作りをはじめます。いい匂いにひかれて、森中の動物が集まってきました…。ぐりとぐらが歌う楽しいたや、ふんわり焼き上がった大きなカステラ、うれしそうに食べている動物たち。子どもの好きなことがいっぱいまった楽しい絵本です。他に『ぐりとぐらのおきゃくさま』『ぐりとぐらのえんそく』『ぐりとぐらのかいすいよく』『ぐりとぐらとくるりくら』があります。

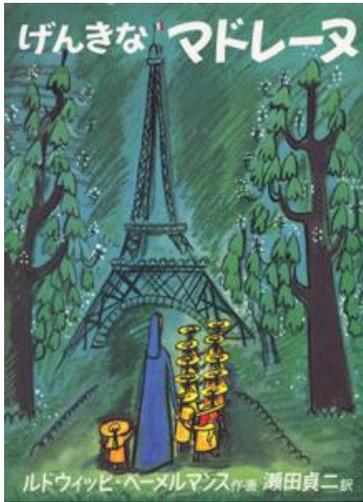


(27×19)

## くんちゃんのだいいりょこう

ドロシー・マリノ文・絵 石井桃子訳  
岩波書店 1986年（イギリス1961）

冬ごもりを前にしたある日、こぐまのくんちゃんは、お父さんとお母さんと散歩に出かけました。南へ渡る鳥たちの話をきいて、自分も行きたくなってきたくんちゃんは、南の国をめざして丘を登り始めましたが、お母さんにさよならのキスをしていなかったのを思い出して引き返します。忘れ物を思い出しては、出かけたり帰ったりするうちに、ねむくなってしまいました。そこで、旅行に出る前に昼寝をすることにしましたが…。他に出版社をペンギン社に変えて『くんちゃんとふゆのパーティー』『くんちゃんのはじめてのがっこう』などが出ています。

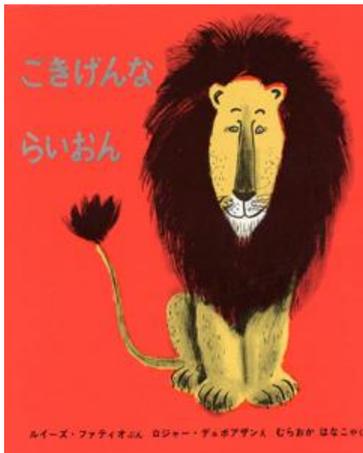


(31×23)

## げんきなマドレーヌ

L・ベームルマンズ作・画 瀬田貞二訳  
福音館書店 1972年(アメリカ1939)

パリのつたのからんだある古い屋敷に、12人の女の子がくらしていました。その中でもいちばん元気なマドレーヌが、ある日盲腸炎になって病院へ運ばれました。そろって見舞にきた11人の女の子は、病室のマドレーヌがうらやましくてたまりません。大胆な線描きと色使いでかかれた、フランスの香りがただようシャレた絵本です。簡潔な訳文もさることながら、パリの有名な建物や場所が美しく描かれていて、大人もたのしめます。他に『マドレーヌといぬ』『マドレーヌといたずらっこ』『マドレーヌのクリスマス』『マドレーヌとジブシー』があります。



(26×21)

## ごきげんならいおん

ルイーズ・ファティオウズ  
ロジャー・デュボアザン絵 村岡花子訳  
福音館書店 1964年(アメリカ1954)

動物園の人気者のライオンはいつもごきげんでした。町の人たちはきもちよくあいさつしてくれます。とくに、飼育係の息子のフランソワとはなかよしです。あるとき、閉め忘れられた戸から散歩にでかけたライオンは、出会った町の人たちにあいさつしますが、あんなに親しげだった人たちが、フランソワ以外はみんな逃げ出すばかり…。ちょっぴり皮肉とユーモアの効いた、シャレたお話です。この第一作のあと、ごきげんならいおんは結婚し、ぼうやがででき、お話はシリーズになり出版社をかえて何冊もつづきます。



(23×29)

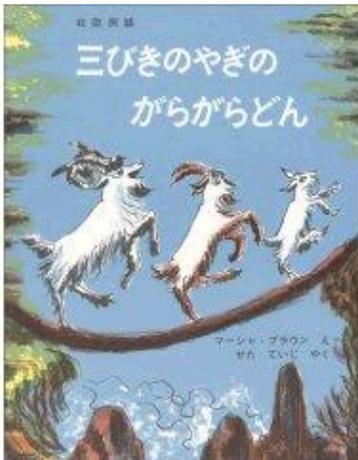
(21×17 「岩波の子どもの本」シリーズ)

## サリーのこけももつみ

ロバート・マックロスキー文・絵  
石井桃子訳

岩波書店 1986年(アメリカ1948)

山へこけももつみに出かけたサリーとお母さん。同じころ、山の反対側ではくまの親子が冬に備えてこけもものお食事中。ところが二組の親子はいつの間に入れかわり、サリーはポリン・ボロン・ポルンとバケツにこけももを入れながら母くまの後を追っていたのです。紺一色で描かれた絵は美しく、秋の訪れた山の感じがよく出ています。サリーや子ぐまたちの表情もユーモラスで生き生きとしています。



(26×21)

## 三びきのやぎの がらがらどん

北欧民話

マーシャ・ブラウン絵 瀬田貞二訳

福音館書店 1965年(アメリカ1957)

山へ草を食べに行こうとした三びきのやぎを、谷川の橋の下でトルルが食べようと待ち構えています。最初にやってきた一番小さいやぎは、「少し待てば、ほくより大きいやぎがやってきますよ」と言って橋を渡ることができます。三番目にやって来た大きくて強いやぎは、トルルに立ち向かい、谷底へ突き落としてしまいます。地味な色調ですが、力強く勢いのある絵は、起承転結のはっきりした筋と共に昔話の野太さをよく伝えています。



(27×19)

## 11 匹きのねこ

馬場のぼる作

こくま社 1967年

11匹ののら猫は、いつもお腹がペコペコでした。ある日、お腹いっぱいさかなを食べるため、山の向こうの広い湖の、怪物みたいなさかなを探しに出かけます。ところが、さかなはとても強くて、猫たちは歯がたちません。そこで…。マンガ風のゆかいな猫たち。子どもたちの好きな食べることをテーマに、決して良い子ちゃんでない猫たちの、知恵とパワーとすとっほげが楽しい絵本です。他に『11匹きのねことあほうどり』『11匹きのねことへんなねこ』などがあります。



(19×27)

## しょうぼうじどうしゃじぶた

渡辺茂男作 山本忠敬絵

福音館書店 1963年

じぶたは小さな消防車。仲間のはしご車、高圧車、救急車は、大火事での活躍を自慢しますが、じぶたの出番はなく、ばかにされるだけでした。ある日、山小屋で火事が！狭い山道ははしご車たちには登れませんが、シーブのじぶたなら平気です。無事に火を消し止めて一躍子どもたちの人気者になりました。子どもはいつも自分の存在を認めて欲しいと思っています。子どもがぴったり気持ちを重ねることのできる乗物絵本です。

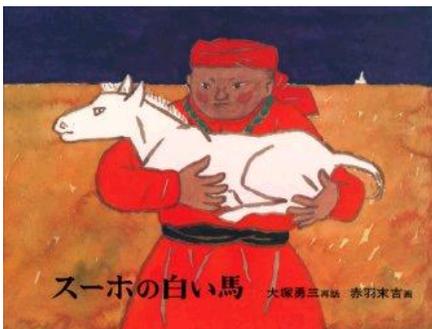


(30×22)

## すてきな三にんぐみ

トミー・アングラー作 今江祥智訳  
偕成社 1969年(アメリカ1962)

黒いマントに黒いぼうしの三人組は、だれもがこわがる大泥棒。ある夜、三人組はみなしごのティファニーちゃんを誘拐します。かくれがで目覚めたティファニーちゃんは、三人組があつめた宝物をみてびっくり仰天。その宝物をどうするのかきかれた三人組はさて、どうしよう…。出だしから、なにやら不気味な感じではじまり、物語の興味をわかさず。後半にかけての意外な展開とのギャップがゆかいなお話です。

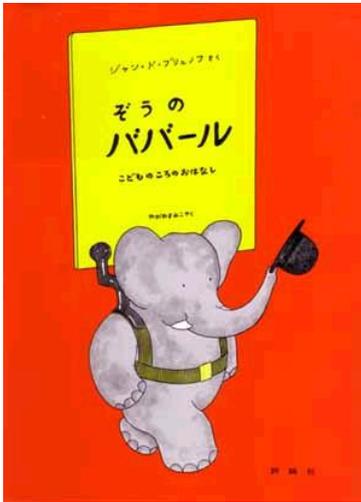


(24×31)

## スーホの白い馬

モンゴル民話  
大塚勇三再話 赤羽末吉画  
福音館書店 1967年

馬頭琴という楽器のいわれを語るモンゴルの民話です。スーホという少年が一頭の白い馬を飼いはじめます。ある日スーホは、町の競馬大会に出場し、みごとに一等になりますが、それを見た殿様はスーホの白い馬を横取りしてしまうのです。離れ離れになったスーホと白い馬は…。少年と馬との熱い心の交流を描いた作品です。雄大なモンゴルの大地と暮らしを感じさせてくれます。



(28×21)

## ぞうのババール

ジャン・ド・ブリュノフ作 矢川澄子訳  
評論社 1974年(フランス1963)

大きな森で生まれた小さなぞうのババールはかあさんぞうをなくして、人間の町の金持ちのおばさんのところで暮らすことになりました。買物したり、ドライブしたり、勉強したり、人間と暮らして物知りになったババールは森へ帰り、ぞうの王さまになります。そして幸せな結婚をするまでのものがたり。暖かみのある絵は細部までいねいに描かれていて、子どもは絵の中で自分が知っているものを見つけてたのびます。ほかに『ババールのしんこんりょう』『おおさまババール』『ババールのこどもたち』『ババールとサンタクロース』などがあります。



(19×27)

## だいくとおにろく

松居 直再話 赤羽末吉画  
福音館書店 1962年

何度橋をかけても流される激流に橋をかけることを頼まれた大工が思案していると、川の中から大きな鬼が現れ、目玉をよこせば橋をかけてやるといいます。立派な橋ができ、鬼は、さあ目玉よこせと迫ります。逃げる大工に、鬼はおれの名前を当てたら許してやるようになります。大工は山奥で不思議な子守唄をきき、そして…。魔物は名前を当てられると魔力を失うと信じられていたのです。絵は力強く華やかで絵巻物を思わせる昔話絵本です。



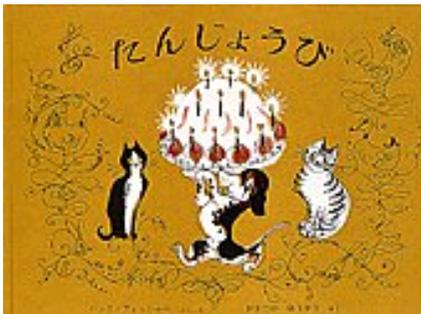
(19×27)

## だるまちゃん と てんぐちゃん

加古里子作・絵

福音館書店 1967年

だるまちゃん は てんぐちゃん の持っている羽根うちわや烏帽子(えぼし)や、下駄や長い鼻が珍しく、欲しくてたまりません。お父さんと一緒に家じゅうの物を引っ張りだして見ても、同じものは見つかりません。でもいいことを思いつきます。だるまちゃんが見つけたものを見て、てんぐちゃんも感心してくれました。子どもらしい思いつきがほほえましく、主人公も、図鑑のように並べられた道具類も、日本の伝統的なものが多く、楽しめます。他に『だるまちゃんとうさぎちゃん』『だるまちゃんとかみなりちゃん』などがあります。



(23×31)

## たんじょうび

ハンス・フィッシャー文・絵 大塚勇三訳

福音館書店 1965年(スイス1948)

森の中のリゼットおばあちゃんの家には、たくさん動物がいっしょに暮らしています。みんな元気がよくいたずら好きです。ある日、おばあちゃん留守に、お誕生日のお祝いの準備を始めますが、てんやわんやの大騒ぎ。でも、夕方帰ってきたおばあちゃんを困らせたパーティーは楽しさいっぱい。最後はねこ達からの素敵な贈り物！動きのあるのびやかな線で、子ども達の好きな動物がユーモラスに画面いっぱいに描かれた楽しい絵本です。



(24×26)

## ちいさいおうち

バージニア・リー・バートン文・絵

石井桃子訳

岩波書店 1965年(アメリカ1942)

ひなぎくの丘に立つちいさいおうちには二つの窓と小さいドアがあって、まるで人間の顔のように、お金には換えられない、建てた人の心がこもるおうちです。一日の明け暮れ、四季の移り変わりが美しく、丹念に描かれています。年月がたつうち、まわりは大都市になって、すっかりみすぼらしくなったちいさいおうちは、また田舎に移ってほっとしました。人間性の回復についても考えさせ、幼い子にも深い感動を与える古典的な絵本です。



(17×17)

## ちいさなうさこちゃん

ディック・ブルーナ文・絵 石井桃子訳

福音館書店 1964年(オランダ1955)

ある日、うさぎのふわふわさんとふわおくさんのところに天使が現れて、二人の間にかわいいうさこちゃんが誕生するというお話です。デザイナーでもある作者によって、はっきりとした色と太い線で簡略化して描かれたうさこちゃんたちは、いつも子ども達に正面から語りかけています。文章もリズム感があって美しく、小さな子どもが両親に読んでもらって耳から入る言葉としては最適のもので。『ちいさいさかな』など、同じ版のブルーナの作品がシリーズになっています。

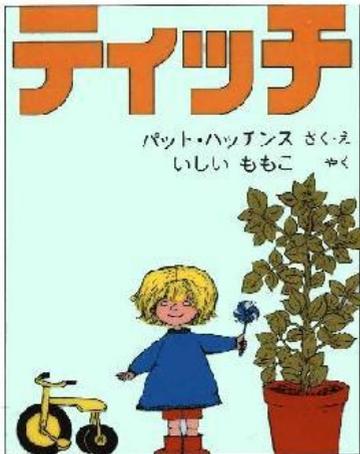


(25×24)

## ちいさなヒッポ

マーシャ・ブラウン作・絵 内田莉紗子訳  
偕成社 1984年(アメリカ1969)

小さなかばのヒッポは、お母さんかばのそばを離れたことがありません。そんなヒッポが言葉を覚える時が来て、お母さんに「グアオ！」というほえ方を習います。そしてある日、初めてひとりで水面に出て、ワニに食べられそうになりますが、「グアオ！」と叫んでお母さんに助けられます。どっしりとしたお母さんかばの姿は圧巻で、お母さんへの信頼感に溢れています。色調はやわらかで、木版画独特の温かい雰囲気 of the 絵本です。

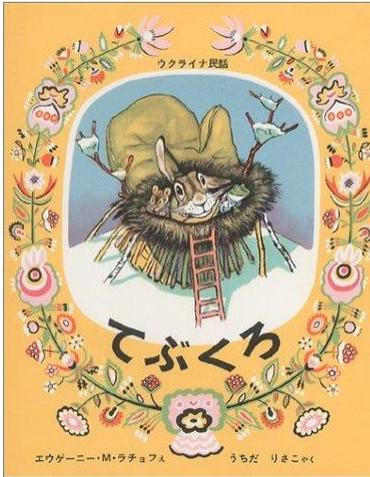


(27×21)

## ティッチ

パット・ハッチンス作・絵 石井桃子訳  
福音館書店 1975年(アメリカ1971)

小さな男の子のティッチは、何をやっても兄さんや姉さんにはかないません。ところがある日、兄さんの大きなシャベルで土を入れた姉さんの大きな植木鉢に、ティッチのとても小さな種をまくと、種はぐんぐんぐんぐん育て…。簡潔な文章とすっきりした絵。始めはしょんぼりしていたティッチの顔も最後には得意満面。いつも大きくなりたいと思っている子どもたちの共感を呼びます。他に『ぶかぶかティッチ』があります。



(28×23)

## てぶくろ

ウクライナ民話

エウゲーニー・M・ラチョフ 絵 内田莉紗子 訳  
福音館書店 1965年 (ウクライナ 1950)

森に落ちていた手袋を、ねずみがみつめて住みつきました。すると、かえるやうさがやって来て「わたしもいれて」と、もぐり込みます。いのししやくままでむりやり入っても、てぶくろは、はじけそうではじけません。ちゃんと納得させてしまう絵がみごとです。リズムカルに繰り返される動物たちのやりとりと、手袋が素敵な家が変わっていく画面は、ワクワクさせられます。しゃれた民族衣装をまとった、個性豊かな動物たちが印象的です。



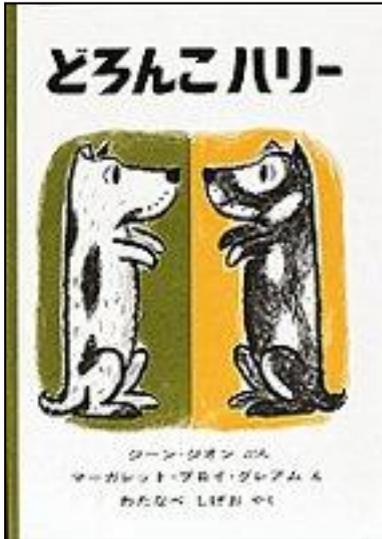
(22×21)

## とらたとまるた

中川李枝子文 中川宗弥 絵

福音館書店 1980年  
(2007年4月現在 絶版)

ひろっぱに丸太が一本ころがっています。虎の子とらたがやってきて、「あ、うまだ」というと、「そりゃ、もちろん、わたしはうまだ」とまるたはいい、とらたは馬にのってかけだします。遊びの中で丸太はカヌーや汽車にもなり、危ない時には「まるたの一本ばし」といってとらたを助けます。ひろっぱは横一本の線で描かれ、ページをくるごとに勢いよく伸びて、道や川や線路になります。子どもはとらたと一緒に冒険を楽しんで満足します。とらたのシリーズは他に『とらたとおゆき』『はじめてのゆき』などがあります。



(31×22)

## どろんこハリー

ジーン・ジオン文

マーガレット・プロイ・グレーム絵

渡辺茂男訳

福音館書店 1964年(アメリカ1956)

犬のハリーはお風呂がきれいです。ある日、ブラシを裏庭に埋めて家をぬけだしました。さんざん遊んでどろんこになり、本当は「黒いぶちのある白い犬」なのに「白いぶちのある黒い犬」になってしまい、家の人にハリーだとわかってもらえません。知っている芸当をみんなやって見せるのですが、やっぱりだめです。ハリーはがっかりしましたが、急にいい事を思いつきました…。緑、橙、黒で描かれたユーモラスな絵が、お話を一層楽しくしています。他に『うみべのハリー』『ハリーのセーター』『ハリーのだいかつやく』があります。



(25×22)

## ねずみくんのチョコッキ

なかえよしを作 上野紀子絵

ポプラ社 1974年

お母さんが編んでくれた赤いチョコッキは、ねずみくにピッタリです。ところがアヒルがやって来て、「ちょっときせてよ」と着てしまいます。「すこしきついがにあうかな？」とサルやライオンなど、つぎつぎ大きな動物が着ていくうちに…。柔らかいタッチの鉛筆画の中に、赤いチョコッキが鮮やかに映えます。同じ言葉の繰り返しのリズムが心地よく、小さい子どもも覚えて一緒に口ずさむようになります。他に『りんごがたべたいねずみくん』『また！ねずみくんのチョコッキ』などがあります。

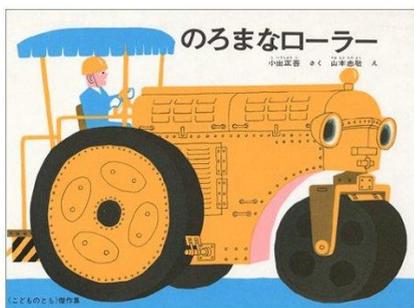


(21×16)

## ねずみのいえさがし (ねずみのほん 1)

ヘレン・ピアス作 松岡享子訳  
童話屋 1984年(アメリカ1966)

一匹のねずみが家を探しに出かけます。ここがいいかな? 植木鉢は寒すぎるし、ストーブは暑すぎる。ねずみはあちこち探し回ります。恐い目にもあいます。さあ、どんな家が見つかるでしょう。簡潔でリズムカルなお話は、ねずみの動きや、はっきりした写真とあいまって、楽しめます。ある少年が飼っているねずみと作者が友達になって作った写真絵本で、ねずみへの愛情が伝わってきます。他に『2.ねずみのともだちさがし』『3.よかったね、ねずみさん』があります。

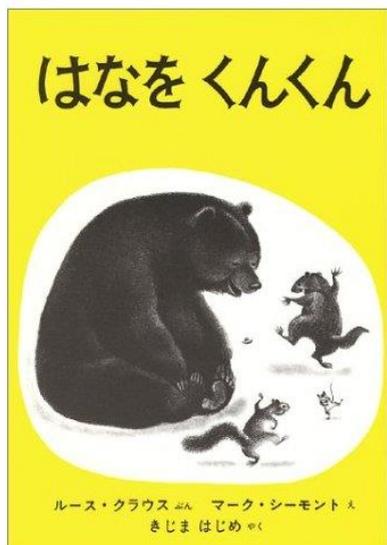


(19×27)

## のろまなローラー

小出正吾作 山本忠敬絵  
福音館書店 1965年

でこぼこ道をならしながら、ローラー車がゆっくりと進みます。トラックや自動車はそれをばかにしながら追い越していきます。でも坂道で次々にパンク。ローラー車が道をたいらにしてくれるおかげで、スムーズに走れるのだということを知ります。早いことがよいとされがちな世の中ですが、のろまでもいいから自分の役割をしっかりと果たすことが大切なのだということをおの絵本は明確に伝えてくれます。のんびりとした口調、ユーモラスな絵が魅力です。



(31×22)

## はなをくんくん

ルース・クラウス文  
 マーク・シーモント絵 木島 始訳  
 福音館書店 1976年(アメリカ1949)

雪に埋もれた森のなかで、冬ごもりしている動物たち。ある日、ふとかぎつけた春のにおいに、ノネズミもクマもリスも目をさましてかけ出します。はなをくんくん、はなをくんくん…。森じゅうの動物たちが集まってきてみつけた、においのもとはなんだったのでしょうか。白と黒だけの世界の中で、ぽっかりあたたかな、小さい黄色。本を囲む親子がほっと溜息をついて顔を見合わせる…。それは至福の時ではないでしょうか。

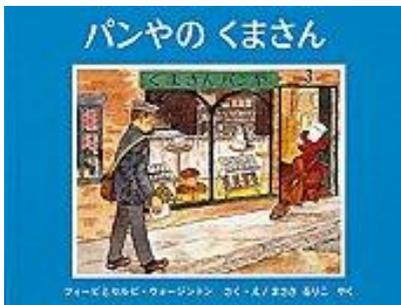


(22×30)

## はらぺこあおむし

エリック・カール作 もりひさし訳  
 偕成社 1976年(アメリカ1969)

小さなあお虫は食べても食べてもおなかがぺこぺこ。食べるのは果物、チーズにケーキまで、子どもたちの大好物。さいごに葉っぱで満腹し、大きく太っちゃになったあおむしは、さなぎになってきれいな蝶に変身するのです。カラージュふうな大胆な構図と、美しい色使い、そして仕掛け絵本ふうに凝った作りが特徴のこの絵本は、いつまでも子どもたちに人気があります。いつも新しい工夫をするエリック・カールの代表作ともいえる絵本です。

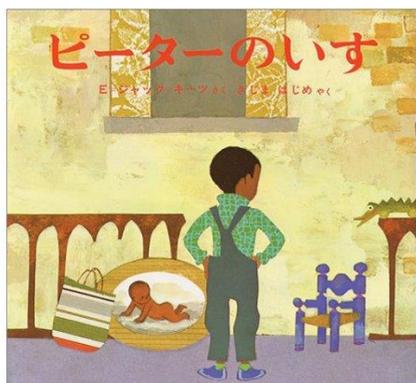


(16×21)

## パンやのくまさん

フィービとセルジ・ウォージントン作・絵  
間崎ルリ子訳  
福音館書店 1987年(イギリス1979)

ぬいぐるみの茶色いくまのパンやさんの一日のお話です。「どさっ、どさっ」と朝早くからパンやパイをこねて焼き、車やお店に並べます。「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と、あいさつを忘れないくまさんのお店は大繁盛です。そして、一日が終わると二階のベッドで休みます。パンを作り、食事をしてお茶も飲み、しっかりと生活しているきまじめなくまさんの魅力がよく出ています。絵も温かい小型絵本です。他に『せきたんやのくまさん』『ゆうびんやのくまさん』があります。



(21×24)

## ピーターのいす

エズラ・ジャック・キーツ作 木島 始訳  
偕成社 1969年(アメリカ1967)

ピーターに妹が生まれました。お母さんもお父さんも妹のことで大忙し。ピーターのものだった揺りかごも、食事椅子もピンクに塗られてしまいました。ピーターは、まだ塗られていない小さい椅子を持って家出します。でもその椅子がもう自分には小さくなってしまったことを知ったピーターは…。両親の愛を独占できなくなった子どもの揺れ動く気持ちと、お兄さんになった自覚が温かく描かれています。布や紙の貼り絵が効果的です。他に『ピーターのくちぶえ』『ピーターのがみ』『ゆきのひ』『ピーターのめがね』などがあります。



(15×11)

## ピーターラビットのおはなし

ビアトリクス・ポター作・絵 石井桃子訳  
福音館書店 1971年(イギリス1902)

こうさぎのピーターは、大きなもみの木の根元の穴で、お母さんや妹たちと暮らしています。ある日、お母さんの言いつけをやぶって、マクレガーさんの畑にしるびこみ、レタスをたくさん食べたまではよかったです…。手のひらにのる位の小さな絵本で、初版以来約100年、世界中によく知られたシリーズの第一作目です。シリーズの中には、小さい子どもには難しいものもありますが、動物たちが生き生きと面白おかしくあらわされ、柔らかな色調の精密な水彩画も魅力です。



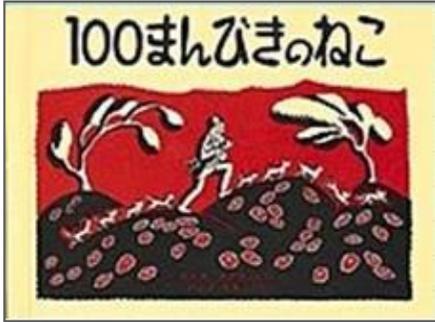
(28×22)

(21×17 「岩波の子どもの本」シリーズ)

## ひとまねこざるときいろいぼうし

H・A・レイ文・絵 光吉夏弥訳  
岩波書店 1983年(アメリカ1941)

きいろい帽子のおじさんがアフリカからつれてきたおさるのジョージは、しりたがりやの元気者。さんざん騒ぎをひきおこしたあと、動物園に落ち着きます。『ひとまねこざる』『じてんしゃにのるひとまねこざる』『ろけっとこざる』『たこをあげるひとまねこざる』『ひとまねこざるびょういんへいく』とつづくシリーズの第一作です。二作目からは、動物園を逃げだして、きいろい帽子のおじさんと町に住むことになった、ジョージのまきおこす、愉快なお話になります。子どもたちは、ジョージのいたすらや失敗に共感しながらも「そこまではやれないよな」と、うらやましい思いや優越感も味わうのでしょうか。子どもたちの支持は時代を超えてつづきそうです。



(20×27)

## 100 まんびきのねこ

ワnda・ガアグ文・絵 石井桃子訳  
福音館書店 1961年(アメリカ1928)

ねこが飼いたいおばあさんのために、ある日おじいさんは探しに出かけます。そして、ひゃくまんびき、一おく、一ちょうひきの、ねこのいる丘にやってきました。おじいさんは1びきだけ選ぶことが出来ず、そろそろとみんな連れてかえります。そんなに沢山は飼えないというおばあさん。そこで、ねこ同士で1びきを選ばせることにしたのですが…。墨一色の絵とリズムカルな言葉がたのしい、絵本の古典です。



(21×17)

## まりーちゃんとひつじ

フランソワーズ文・絵 与田準一訳  
岩波書店 1956年(アメリカ1951)

まりーちゃんは、仲よしの羊のばたぼんに子どもがうまれたら、毛を売って好きな物が買えると楽しみにしています。そして、2ひきだったら新しいくつ、3ひきだったら赤い帽子と、空想はどんどんふくらんでゆくのですが…。ばたぼんの「はらっぱには、ひなぎくのはながきれいきれい、おひさまがいちんちきらきら…」という詩のようなくり返しのことばも美しく、1ひき、2ひきと増えてゆく子羊の絵もかわいい絵本です。他に『まりーちゃんのくりすます』『まりーちゃんとおおあめ』などがあります。



(27×21)

## もりのともだち

マーシャ・ブラウン作 八木田宜子訳  
富山房 1977年(アメリカ1967)

野うさぎがきつねにだまされ、家から追い出されてしまいます。野うさぎが泣きながら森の中を歩いていると、つぎつぎに、ともだちに出会います。強いはずのひぐまとおおかみは、したたかなきつねを追い出すことができませんが、力のないはずのおんどりは、勇ましい歌をうたってきつねを追い出してしまいます。お話は歯切れよいテンポで進み、性格がちんと描き分けられた動物の表情は愉快です。昔話のおもしろさを、あますことなく伝えている絵本です。



(19×27)

## もりのなか

マリー・ホール・エツツ文・絵  
間崎ルリ子訳  
福音館書店 1963年(アメリカ1944)

小さな男の子がラッパを持って、一人で森の中へ散歩にでかけました。ライオンにそう、くま、カンガルー、こうのとりに、さる、そしてうさぎと、つぎつぎ動物たちに出会います。みんな一緒に楽隊になって散歩し、おやつを食べ、そして遊びました。かくれんぼで男の子が鬼になり、目をあけると、動物たちはいなくなっていて、お父さんが迎えにきていました。お話は幻想的で不思議な魅力があり、絵は墨一色ですが、色を感じさせます。



(16×23)

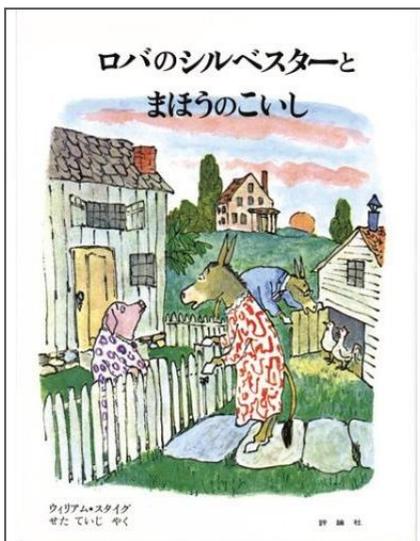
## ラチとらいおん

マレーク・ペロニカ文・絵

とくながやすもと訳

福音館書店 1965年(ハンガリー-1961)

ラチは、世界でいちばんよわむしの男の子。犬もかわいいし、暗い部屋にも一人では入れません。ともだちさえこわくて、だれともあそべないのです。ラチが好きなのは、絵本の中の強そうなライオン。そんなラチに、あるとき、赤くて小さなライオンがあらわれて、ともだちになってくれます。ライオンにきたえられて、ラチはいつのまにか強くなっていました。強くなりたい子、ともだちとあそべるようになりたい子にはたのもしい絵本です。



(29×22)

## ロバのシルベスターとまほうのこいし

ウィリアム・スタイグ 瀬田貞二訳

評論社 1975年(アメリカ1969)

かわった形や色の小石を集めることが好きなシルベスターは、魔法の力をもつ、赤い小石をみつけます。ところが、はらをすかせたライオンに遭って、あわてて自分に魔法をかけ、岩になってしまいます。もとの姿に戻れないシルベスターの心細さと、かわいい息子がなくなった父さんと母さんの悲しみがしみじみと描かれ、子どもはお話の中にグイグイ引き込まれます。すてきな五月晴れのいちご山で、親子の願いがかんう結末は感動的です。新版・『ロバのシルベスターとまほうの小石』(評論社 2006年)も出版されています。

## わたしと あそんで



マリー・ホール・エッツ ふん/え  
よだ・じゅんいち やく

(27×20)

## わたしとあそんで

マリー・ホール・エッツ文・絵 与田準一訳  
福音館書店 1968年(アメリカ1955)

小さい女の子が、はらっぱへ遊びに行き、小さな動物たちに「遊びましょ」と呼びかけます。でもだれも遊んでくれません。がっかりして、池のそばで女の子がじっとしていると、次々に動物たちが女の子の所に戻ってきました。そして、すてきなことが起こったのです。黄色の淡い色調の、やさしい絵です。愛らしい女の子の表情と、動物たちにかこまれて喜びに包まれる結末が、この絵本をいっそう温かいものになっています。